

国立国語研究所学術情報リポジトリ

First-Person pronouns with and without wa in response

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金, 青華, JIN, Qinghua メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003505

応答発話に用いられる「私は」と「私φ」

金 青華 (筑波大学)

First-person pronouns with and without *wa* in response

JIN QINGHUA (Tsukuba University)

要旨

本研究は相互行為上の一人称代名詞の役割を明らかにすることを目的とし、日本語母語話者が一人称代名詞を用いて、応答発話を組立てる現象を、会話分析の手法を用いて分析する。本研究では、主にいわゆるトピックマーカである「は」が付いている「私は」と助詞が付いてない「私φ」が用いられる応答発話を調べることにより、「私は」と「私φ」が相互行為上、異なる役割を果たしていることを記述する。すなわち、「私φ」は質問の不適切さを明らかにすることにレバントな、新たな自分の情報を産出する際に用いられ、「私は」は、質問によって要請されている話し手の経験・状況が、異なるグループ・タイプの人々によって、多少異なるタイプで共有されている、または共有される可能性がある際に用いられる。

1. はじめに

日本語では話し手が自分に関して語る場合、談話の場面性や述語などの手がかりにより話し手自身が予測されるため、一人称代名詞を用いないことが多い(水谷、1985; 森田、1998など)。しかし、ある特定の文脈では、話し手のことが語られていることが会話参与者に理解されているにもかかわらず、一人称代名詞が明示される場合がある。このような現象に関して、Ono&Thompson (2003) は、一人称代名詞が話し手を指す「指示機能」を果たす同時に、それ以上の語用論的な機能を果たしていると指摘している(P.329)。さらに「指示機能」を果たしていない一人称代名詞の存在も認め、非指示機能として「フレーム設定 (frame setting)」機能と「感情的 (emotive)」な機能を挙げている。この研究結果から、一人称代名詞は単なる話し手への言及を明確にするわけではなく、語用論的、相互行為的な機能を果たしていることがわかる。

そこで、本研究ではハーヴィ・サックス、エマニュエル・シエグロフ、ゲール・ジェファーソンを中心に開発された会話分析の手法を用いて、「質問—応答」の連鎖の応答発話という特定の位置において、一人称代名詞¹—助詞「は」が付く場合(「私は」と、付いてない場合(「私φ」))—が使用されている事例を詳細に記述する。それにより、「私は」と「私φ」の使用がどのように相互行為の組織に関わっているかということについて記述し、話し手が相互行為上の異なる課題に対して、それぞれ「私は」と「私φ」を用いて対処することを記述する。

2. 一人称代名詞に関する先行研究

本節では、実際の日本語会話における一人称代名詞の使用に関して研究した先行研究を紹介する。

¹ 本研究で取り扱っている一人称代名詞には、「私」、「あたし」、「ぼく」、「おれ」、「うち」などが含まれている。

まず、Ono&Thompson (2003) は、一人称代名詞が産出される動機から、一人称代名詞の使用には3つのタイプがあると主張している。すなわち、「指示対象を念頭に置いて使用された一人称代名詞 (first-person pronouns motivated by referential considerations)」、「フレーム設定 (frame setting)」の一人称代名詞、および「感情的 (emotive)」な一人称代名詞である。彼らは「指示対象を念頭に置いて使用された一人称代名詞」の90%が助詞を伴っていると指摘している。また、指示対象を明確にする場合と、指示対象が明確にもかかわらず、使用される場合があると指摘している。そして、非指示機能としての「フレーム設定」機能は、「後続の発話に対して主観的なフレームワークまたはスタンスを提供する」と主張し、「述語とは別のイントネーション単位で発生する傾向がある」と示唆している (p.336)。さらに、「感情機能」の場合は、「述語が話者の感情・感情を表し」、無助詞で使用される傾向があると指摘している (p.331)。

また、応答における一人称代名詞に注目した張(2014)は、インタビュー形式の談話資料を用いて、質問者の意図との関係と応答発話の内容によって一人称代名詞の使用状況を調べた。その結果、聞き手の期待や想定を相反する発言をする場合、および自分の経験や好みなどの自分の特性を述べる場合、一人称代名詞が明示されると提示している。

ほかに、「私 ϕ 」と「私は」の使い分けに注目した荊宿(2014)は、「私 ϕ 」のみが用いられる領域と、「私 ϕ 」と「私は」が両方用いられる領域があると主張し、前者において「私 ϕ 」は「新規話題を導入する機能」があると論じている。そして後者において「私は」は「対比」の意味合いを、「私 ϕ 」は「自分の経験や考えを聞き手にわかってほしい」という話し手の発話態度を表していると指摘している。

以上の先行研究から、一人称代名詞が話し手への言及を明確にする機能だけでなく、語用論的・相互行為的な機能を果たしていることが明らかになった。さらに、「私 ϕ 」と「私は」が異なる働きをする可能性があることが示唆されている。しかし、これらの先行研究は一人称代名詞を含んだ発話のみ分析し、一人称代名詞が産出される連鎖環境と、それらの使用により、会話参加者たちが何を成し遂げているのかについては分析していない。本研究では、「私は」と「私 ϕ 」が繰り返して使用される特定の位置、すなわち、「質問—応答」の連鎖における応答発話に焦点を当て、応答発話を産出するうえで一人称代名詞が重要な働きを果たしていることを明らかにする。さらに、「私は」と「私 ϕ 」によって達成される相互行為上の働きに違いがあることを記述する。

3. 分析データ

本研究では次の二つのコーパスを使っている。(1) 2019年1月に公開された『日本語日常会話コーパス』(CEJC)のモニターデータ。このコーパスには、126会話、約50時間(平均2.5時間/1人)のデータが収録されている。会話参加者は、延べ392名、異なり237名であり、家族、友人知人、仕事関係者、学校等の関係者、公共商業サービス関係の会話者間の会話である。そして、仕事学業、家事雑事、食事、社会参加、私的活動、移動、休息など、多様な活動が収録されている。(2) 宇佐美まゆみ監修(2018)『BTSJ日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声)2018年版』の中で、音声データのある日本語母語場面初対面会話31組を用いた。この二者対話は約8時間40分にわたり、会話参加者は、延べ62名、異なり26人名である。

4. 分析

「質問－応答」連鎖における質問は、次の発話に対して応答という特定のタイプの発話が行われること、また質問の形式に適合した応答がなされることを要請している（串田・林, 2015）。しかし、質問を向けられた者がその要請に応じるような発話を産出できない時、「質問に適合した応答を産出せよ」という要請と、その要請に応じることを妨げる事情とを、どのように調停したらいいだろうか」という実際の課題に直面することになる串田・林, 2015)。本研究で収集した「私は」と「私φ」が用いられる応答発話のすべてのケースは、応答を産出していく際に生じた何らかのトラブルに対応している場合であった。次の4.1では、話し手が「私φ」を用いて応答発話を組み立てることにより、何を成し遂げているかを明らかにする。

4.1 「私φ」が用いられる応答発話

この節では無助詞「私φ」が用いられる「応答発話」の事例を、会話分析の観点から詳細に分析する。まず、次の断片を検討しよう。Aは埼玉に住んでいて、東京にある会社まで通勤電車通っている。この断片の直前で二人は東京の電車には人が多いことに共感し合っていた。

(1) [会話 182_03 : 58—]

- 01 A 地方で(.)働け(h)たら働きたいっていうのもあるんですよね(h). =
 02 =今 : : 私 : 会社が : .hh 新宿のほうにありまして,
 03 C [° はい°
 04 A [° で°、逆に : あの : (0.5) 全国(h)展開してないので : (h)hh.
 05 C あ : じゃま異動とかもない(.)[()].
 06 A [そう =
 07 (中略)((Aは異動がめったにないことについて説明している.))
 10 (1.0)
 11 A それで : (1.0)ほ()ほとんどないん : で, (2.5)()だけ : やっぱり(0.5)ゴミ
 12 ゴミして : て, やっぱり, さい - 私 : 住んでる埼玉のほうとかでも(0.5)なんかオフ
 13 イスでもあれば, そっちの : そっちでも(h)いいな : っていう気がするんですけれ
 14 どね(h). .h(0.5)やっぱり : (0.5)都心 : : にどンドン集中してま(.)すからね.
 15 (2.5)
 16→C あっちですか?川 : 越とか, 熊 : 谷とか.
 17→A いや, 私ただ(.)あの : 東京のすぐ隣の川口ってところなんですけ[ど.
 18 C [あ : 川口.
 19 A え :

Aは01行目で「東京は人が多い」という先行発話に関連づけ、地方で働きたいという自分の望みを言い出し、会話を継続させている。しかし、Aは01行目に対する聞き手の反応を待たず、次のTCUに「走りこんで」、会社が都心部にあること(02行目)と、勤務地が変わらないこと(04行目)を挙げている。Aは02行目と03行目で「走りこんで」自分がなぜ地方で働きたいと思っている理由を述べることにより、「自分の望み」が聞き手にやや唐突さを与える可能性があることに対処している。これに対し、05行目でCが「全国展開」を「異

動」に言い換えることにより、理解を示し、Aが06行目で「そう」とCの理解を受け入れた後、続いて今の会社に人事異動がめったにないことについて説明を加えている。その後、聞き手が反応せず、1秒の長い「間合い」が生じたため(10行目)、Aが再び発話の順番を取る。11行目で「それで：(1.0)ほ()ほとんどないん：で」と先行発話をまとめ、「さい-私：住んでいる埼玉の方とかでもオフィスがあれば」と、働きたい場所を「地方」から割と東京に近い「埼玉県」に「格下げ」して、人が少ない所で働きたいことを繰り返し、会話を収束させている。ここで注目したいのは、Aが「希望の勤務地」を取り上げるとき、「さい-」と言って音を途中停止し、「私：住んでいる埼玉」と「自己開始自己修復」を行ったという点にある。先行発話で既に埼玉に住んでいると述べていたAが、人口が少ない所で働きたいという望みを述べる最中に、再び自分が住んでいる場所を言及したということは、話し手が自分の住んでいる所を、都心のようなゴミゴミした感じのない所として認識していることを示している。

続いて、Cは16行目で「川：越とか、熊：谷とか」と、埼玉県の中でも東京から遠い場所を候補として取りあげながら、「居住地」に関して確認し、新しいトピックを開始している。この質問行為は、ゴミゴミした感じのない所に住んでいるというAの先行発話を理解し、さらに「東京から遠い地域に住んでいる」と想定したうえでの質問であることを示している。これに対してAは、応答の冒頭に「いや」を用いて、先行質問への抵抗を示した後、単なる「川口」ではなく「ただ東京のすぐ隣の」を加えることにより、「東京から遠いところに住んでいる」という質問の想定が不適切であることを明らかにする。このように、「私φ」により始められた応答発話は、質問が求めている情報内容を提供するだけでなく、質問行為の想定に不適切性を見出した際に、その不適切性を明らかにするための、自分に関する新たな情報を示している。

もう一つの断片(2)を見ていただきたい。これはBとSは初対面の会話である。Bは福島出身で、現在東京で一人暮らしをしている。Sは東京出身である。01行目でBは「やっぱり(1)、東京は暑いですね」と、聞き手の同調を求めている。

(2) [会話 205_14 : 26—]

- 01 B やっぱり(1)、東京は暑いですね。
 02 S (h)あ：ついですか(h)。
 03 B [うん。
 04 S [hhや、hh福島けっこう雪降りますよね。
 05 B あ、そうです[ね、うん
 06 S [はい
 07 ふ：：：ん
 08 B ただ夏は福島も(0.5)温度はけっこう[東京と同じくらいになるんですけど=
 09 S [あ：：うん
 10 B =ただ(.)夜は(.)涼しく[なるんで、あっちは。
 11 S [あ、涼しく、ん：：
 12 S 東京は蒸し[暑い。
 13 B [そう、ずっとなんか、夜も暑いから[hhhh
 14 S [hhhh
 15 B 辛いですね。

- 16 S あ：東京、あっ、(福島って)そうなんですね。
 17 (2.0)
 18→S あじゃ：けっこうもう(.)クーラー効かしてんですか、夜↑。
 19→B あ、実は僕クーラーないんですよ。
 20 S あ、(h)ないんで[すか：(h)ahahaha.h
 21 B [hhhhhh
 22 S え：[：：：
 23 B [だからもう、かなり(0.7)もう[夜は、窓を開けて、
 24 S [あ：
 25 S あ：あ

01行目の同調を求めるBの行為に対し、Sは02行目で同調していない。しかし、04行目で「や」と、自分の行為の不適切さを感じ、「福島」に関する自分の知識を示しながら同調をしている。これに対し、Bは知識状態の変化を表す「あ」(Heritage, 1984)を用いて04行目のSの同調と自分の想定にずれがあることを示している。そして、08行目で再び福島と東京を比べながら、東京の暑さを具体的な説明している。これに対し、Sは11行目で理解を示し、「東京は蒸し暑い」と、01行目のBの主張に同調している。その後BはSの同調を受け入れ、話題を収束させようとしている。Sも16行目でセルフリペアすることにより話題を収束させている。17行目の2秒の「間合い」のあと、Sは「あじゃ」と話題をリセットし、「クーラーを効かしているか、夜」と質問している(18行目)。この質問は、Bの部屋にクーラーがあるということを明示的に前提している。これに対しBは19行目で「あ」を用いて、質問に何らかの抵抗があることを示し(Heritage, 1998)、「実は僕クーラーないんですよ」と、自分に関する新たな情報を産出することにより、Sの質問の前提を否定している。この応答は、質問の前提を否定することにより、質問が求めていた情報を提供しない理由を構成している。

以上の分析から、応答者が質問行為の想定・前提などに何らかの不適切性があることを感知した時、その不適切性を明らかにすることにレレバントな、新たな自分に関する情報を、明示的な「私φ」を用いて産出することがわかった。

4.2 「私は」が用いられる応答発話

この節では、「私は」が用いられる応答発話の事例を分析し、一人称代名詞の形式が異なることにより、相互行為的な機能に相違点があるのかについて検討していく。O,S,Nは英会話教室の友人である。SはOとNより少し年齢が上である。断片3の直前のやり取りでは、NがSに海外はどこに行ったかと質問し、これに対し、ビジネストリップはシンガポールくらいしかないけど、遊びで2年前にロンドンに行ったとSが応答している。その後、ずっと雨だったことや、飯が噂の通りまずかったと語っている。それを聞いて、01行でOが「実際どうまずかったんですか」と聞いている。

(3) [会話 T001_014 40:06—]

- 01 O 実際にどうまずかったんすか。
 02 S なんだろう。あの：(1.3)なんか(.)バリエーションがまずない。
 03 O あ：[は：は：

- 04 N [(頷いている))
 05 S で(.)あっ(.)ちょっとこれはうまいなと思ったらイタリア料理とか[だった。
 06 O [うふふ
 07 N [>そうそうそうそうそうそうそうそうそうく
 08 S [基本現地の料理じゃない。うん
 09 O [hhhhhhhhhh
 10 N そうなんすよね。
 11 S うん
 12 N わたしも[(1)四年前?(.)三年前?
 13 S [味が(.)単調?
 14 うん。
 15 N 行きましたよ。[ロンドン。
 16 S [お:::ん。
 17->O あっ、新婚旅行で?
 18->N 新婚旅行ですね。[僕は。
 19 S [あ:そうなんや。
 20 味が単調:に[すごい感じ[た。
 21 O [hhhhhh
 22 N [ね:。
 23 フィッシュポテト食べてないっすけどね:。
 24 S あっ、フィッシュアンドチップス食べた 食べた。
 25 N あ:食べました?

まず、注目したい所は、Sがロンドンに関する情報を語った後、聞き手であるOとNの受け入れ方である。Oはロンドンの飯について質問した者でもあり、Sの応答に対して「あ:」と(03行目)、Sの持たされた情報により自分の知識状態が変化したことを示している。一方、Nは、07行目と10行目で、Sの提供した情報が自分の知識状態と一致していることを示し、「共通の経験」を持っている者としての振る舞いをしている。さらに12行目では「ロンドンに行ったことがある」と、Sと共通の経験を持っていると示し、自分の語りを開始している。これを聞いて、Oは「あっ」と何らかの気づきを示した後、「新婚旅行で?」とロンドン旅行の目的について質問している。OのYes/No質問に対し、Nは単に受け入れるわけではなく、繰り返しの応答を産出し、さらに「ぼくは」と続け、応答発話のTCUを「延長(increment)」している。このように「ぼくは」を付け加えることにより、Oの質問によって明確にされた自分の「旅行の目的」が、Sの「旅行の目的」と微妙に異なることに気づいたことを巧みに表している。すなわち、Sと共通の経験をしているけど、Sはただの旅行でロンドンに行ったことに対し、自分は「新婚旅行」でロンドンに行ったことを表している。

このように、質問によって要請されている話し手の経験・状況が、異なるグループ・タイプの人々によって、多少異なるタイプで共有されている、または共有される可能性があることを、「私は」により明示的に示している。すなわち、先行文脈で喚起された活動・行為・経験に自分も携わっているけど、他の参与者と何らかの違いがあることに気づき、そのスタンス・認識を明確にするために、「私は」が用いられている。

5. 結論

本研究では、日本語母語話者が一人称代名詞「私は」と「私φ」を用いて、応答発話を組立てる現象を、会話分析の手法を用いて分析した。その結果、「私は」と「私φ」が相互行為上、異なる役割を果たしていることがわかった。すなわち、「私φ」は質問の不適切さを明らかにすることにレレバントな、新たな自分の情報を産出する際に用いられる一方、「私は」は、質問によって要請されている話し手の経験・状況が、異なるグループ・タイプの人々によって、多少異なるタイプで共有されている、または共有される可能性がある際に用いられることがわかった。また、「私は」は単に話し手と先行文脈で現れた他の指示対象との「対比」を表しているよりは、相互行為上、特定の行為を形成するにあたって、いくつかのアスペクトの間に生じたコントラストを表すことがわかった。

参考文献

- 荻宿紀子 (2014). 談話における自称詞のいわゆる「無助詞」現象—言わなくても分かるときに言う「わたしは」の機能— 表現研究, 99, 40-49.
- 串田秀也 (2005) 「いや」のコミュニケーション学—会話分析の立場から— 言語, 34(11), 44-51, 大修館書店
- 串田秀也・林誠 (2015). WH 質問への抵抗—感動詞「いや」の相互行為上の働き— 友定賢治(編)感動詞言語学, 169-211, ひつじ書房
- 張希朱 (2014). 質問の答えに表れる一人称代名詞の明示と暗示 日語日文学研究, 91, 415-430.
- 水谷信子 (1985). 日英比較 話し言葉の文法 くろしお出版
- 森田良行(1998)『日本人の発想、日本語の表現「私」の立場がことばをきめる』中公新書
- Heritage, J. (1984) A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In: Atkinson, J. M. and Heritage, J. (Eds.) Structures of Social Action. Cambridge : Cambridge University Press. pp.299-345.
- Heritage, John, 1998. Oh-prefaced responses to inquiry. Language in Society 27, 291-334.
- Ono T., Thompson S. A., 2003. Japanese (w)atashi/ore/boku 'I': they're not just pronouns. Cogn. Linguist. 14, 321-347.
- Sacks, H., 1972a, "An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology," Sudnow, D. ed., Studies in Social Interaction, New York: Free Press, 31-74.(=1989, 北澤裕・西阪仰訳「会話データの利用法—会話分析事始め」G. サーサス・H, ガーフィニケル・H, サックス・E, シェグロフ『日常性の解剖 学—知と会話』マルジュ社, 93-173.)